

3 豚のオーエスキー病清浄化に向けた四半世紀の取り組み

県央家畜保健衛生所

山本 和明 大須賀 朋子
 石川 梓 津田 彩子
 太田 和彦 原田 俊彦
 前田 卓也

はじめに

オーエスキー病（以下、AD）は、昭和56年2月、山形県に我が国初の発生が確認され、その後、茨城県、福島県、千葉県に発生し、全国に広がった。現在ADが浸潤しているのは東北、関東、九州の13都府県のみとなっている。神奈川県は初発から現在まで四半世紀をかけてAD清浄化に取り組み、平成21年12月に最後の野外抗体陽性豚のとう汰が終了した。その後、管内のAD侵入農場全ての農場で一度は母豚の全頭検査をおこない、野外抗体陰性を確認し、県内からADウイルスが排除されたと考えられた。この四半世紀におよんだ取り組みの概要についてとりまとめたので報告する。

管内におけるADの浸潤状況

本県におけるADの届出状況は図1のとおりであった。昭和59年に1戸10頭、60年に2戸34頭の発生があり、61、62年は届出がなく、昭和63年に16戸2,820頭、平成元年8戸266頭、2年4戸153頭、3年4戸122頭、4年1戸1頭、平成14年に10年ぶりに1戸5頭の発生があり、これを最後に現在までADの発生はみられていない。昭和61、62年の間は発生の届出はなく広がりはないようにみえるが、表1のとおり昭和61年に19戸、62年に41戸新たな農場へ広がりがみられた。

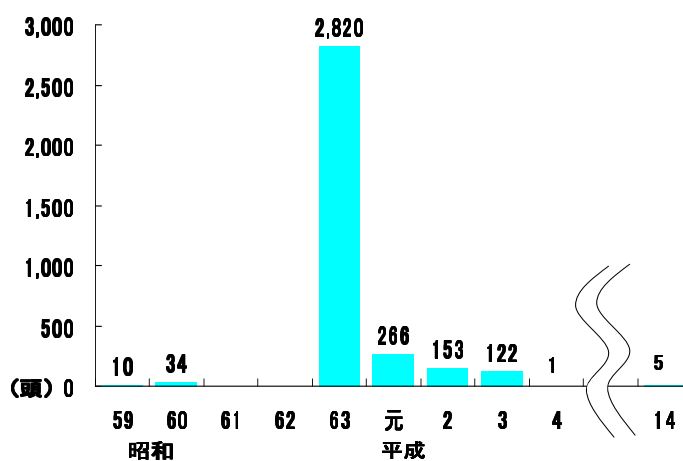


図1 本県におけるオーエスキー病の届出状況

表1 本県の野外抗体陽性豚の検出状況
(昭和59～62年度)

年度	検査頭数	検査結果		
		陽性頭数	陽性率(%)	陽性農場戸数
59	14,488	68	0.5	3
60	16,635	330	2.0	13
61	11,287	2,471	21.9	19
62	9,717	1,536	15.8	41
計	52,127	4,405		

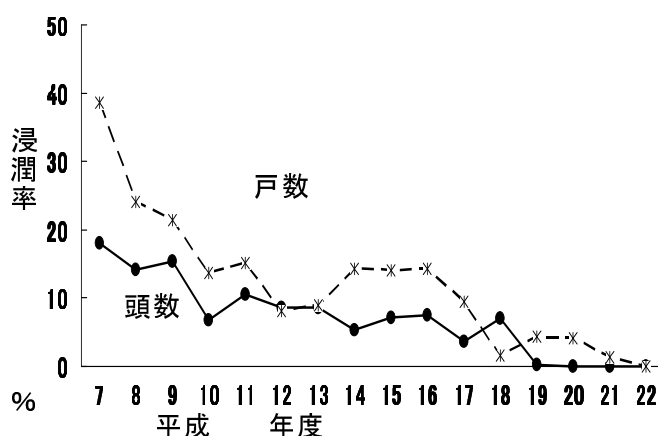


図2 本県の野外抗体陽性率の推移

本県の野外抗体陽性率は昭和61年度は21.9% (表1) ワクチン実用化4年後の平成7年は戸数ベースで40%、飼養頭数ベースで20%近かった野外抗体浸潤率であったが、平成22年度第3四半期現在戸数、頭数とも0%になった。(図2)

A D 発生前の対応

本県のA D発生前までは昭和56年3月23日付け農林水産省畜産局長通知「A Dの防疫対策について」に基づき、養豚関係者へ指導を行うとともに、昭和56年4月27日に神奈川県A D防疫対策会議を開催し、養豚関係者と対策を検討した。この結果をふまえ、昭和56年5月9日には、「神奈川県A D防疫基本方針」が制定され¹⁾、繁殖豚の定期検査(10%、年2回)と抗体陽性豚の摘発とう汰が決められた。

A D 発生後の対応

昭和59年5月11日に藤沢市内でA Dの発生があり、ただちに全頭とう汰したところ、感染が拡大することなく直ちに終息した^{2,3)}。そして、緊急防疫対策会議を開催し、全家畜保健衛生所の平常業務を一時ストップし、県下一斉立ち入り検査を668戸について行った。このうち172戸、1,675頭について抗体検査を実施し、全て陰性を確認した。

昭和59年7月に神奈川県A D防疫対策協議会を設立し、抗体陽性豚とう汰奨励金制度(以下、とう汰奨励金)を発足し清浄化とともにまん延防止に努めた。これで、本病の発生はないものと思われた

が、昭和60年4月綾瀬市、海老名市に発生があった。さらに綾瀬市、清川村で抗体陽性6農場が確認された。海老名市、綾瀬市の発生農場と清川村の抗体陽性1農場は速やかに清浄化が図られたが、残念ながらこれらの農場はあらたに豚を導入することなく廃業した。5農場は経営に支障をきたすとの理由から、抗体陽性豚とう汰未了農場となった⁴⁾。清川村の農場では抗体陽性母豚から更新用の清浄種豚を確保するため、子豚隔離方式を行ったが、期待した効果は得られなかった⁵⁾。

昭和61年からは、県下で抗体陽性豚の摘発が相次ぎ、とう汰奨励金に対して、休業中の補償をどうするかなど農家個々の経営上の違いから足並みが揃わなくなったことや、これを機会に廃業しようとしている農家が多数にのぼり、再建を志す農家から廃業奨励につながるのではないかと、との意見が多数出されたため9月にとう汰奨励金を凍結した。昭和63年度には繁殖豚の病気だといわれていた本病だが、肥育豚での集団発生を確認した^{6,7,8)}。しかし、有効な防疫手段が確立されおらず、損耗防止対策を中心とした対応を取らざるを得なかった。

図3は平成4年現在の本県におけるAD浸潤状況である。ADは13市町村にまで拡大した(図3)。

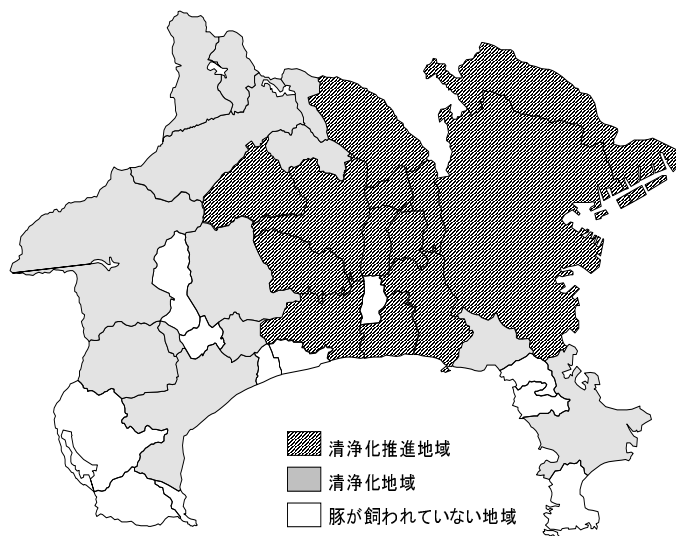


図3 本県におけるAD浸潤状況(平成4年)

ワクチン接種による対応

欧米では、ワクチンが実用化され、被害の低減が報告されていたことから、養豚団体から県および国に対しワクチン使用の要望が出され、平成元年7月より、AD防疫方式確立対策として本県を含む関東5県でワクチンの野外試験を開始した^{9,10,11)}。本県では、家畜保健衛生所と家畜病性鑑定所が中心となりワクチンの選定や接種計画の策定等を実施した。その結果、平成3年6月に国のAD防疫対策要領に沿ってワクチンによる効果的な清浄化を推進することを目的とした神奈川県AD防疫対策実施要領(以下、県要領)を新たに定め、清浄化に向けた対策を講じた。平成3年10月(社)神奈川県家畜畜産物衛生指導協会が事業主体となりワクチン接種を開始した。ワクチン接種開始時は一部の生産者で移行抗体を

考慮しないで使用されたため、その効果が疑問視されたこともあったが、家畜保健衛生所の根気強い指導によりワクチン接種による清浄化がすすめられた。平成10年4月に県要領に基づく年2回の繁殖豚10%検査を家畜伝染病予防法第5条の検査に位置付け現在も継続している。

ワクチン接種が本格的に始まり、本県でのAD発生はないものと思われたが、平成14年3月に陰性農場で、新たな発生が確認された¹³⁾。しかし、県下の清浄化はすすめられており、同年10月に旧東部家畜保健衛生所管内の抗体陽性豚のとう汰が終了した^{12, 14, 15)}。その後も、ワクチン接種の徹底が図られ、清浄化に向けた取り組みが進み、昭和60年に凍結したとう汰奨励金を有効活用する時期に来たとの生産者からの意見により、平成17年3月にとう汰奨励金の凍結が解除された。平成20年6月に国のAD防疫対策要領改正をうけ、県要領の一部改正を行い、新しいステータス区分による清浄化対策を開始した。

平成14年に発生した農場は、発生直後からワクチン接種による対策を行うとともに、いままで蓄積した清浄化対策を活用し管理獣医師の協力のもと、繁殖豚へのワクチンの頻回接種と肥育豚の接種日齢の見直し、抗体検査による野外抗体陽性豚の計画的とう汰を行った、野外感染抗体保有豚がほぼ排除されたと考えられた平成21年10月に繁殖豚172頭全頭の検査を実施し、摘発された抗体陽性豚7頭のとう汰をした。とう汰完了半年後の平成22年5月、再度、繁殖豚全頭検査を実施し全頭野外抗体陰性を確認した。このことにより県内の野外抗体陽性豚のとう汰は終了した。

現在の対応

平成22年5月現在の県要領に基づく県下のステータス区分は図4のとおりである。AD県要領では、各地域の清浄化の進捗状況を踏まえ、市町村単位の地域区分を、地域における本病の清浄化が円滑かつ的確に推進できる区分に変更することが出来ることになっているのだが、今回は地図を見やすくするため、ステータスⅡが一戸でもあればその市町村はⅡと表記した。抗体陽性豚は全く確認されていないが、ワクチン接種の有無によりステータスⅡ、Ⅲおよび清浄なⅣに分類している（表2、図4）。ステータスⅡの地域は横浜市、相模原市、清川村、厚木市、綾瀬市、伊勢原市、平塚市の7市村で、この地域は感染豚の摘発はないが、ワクチン接種をしていることによりこのステータスになっている。ステータスⅢの地域は海老名市、藤沢市、茅ヶ崎市の3市でこの地域は準備が整い次第ステータスⅣへ移行する予定である。ステータスⅣの地域は川崎市、横須賀市、鎌倉市、秦野市、南足柄市、大磯町、愛川町の7市町であった。また、農場数では県下81農場中31戸がステータスⅡ、15戸がステータスⅢ、35戸がステータスⅣと、6割がワクチン接種を中止している農場であった。

表2 ステータス区分

ステータスⅠ(清浄化対策準備段階)
感染豚の摘発がある+ワクチン接種が行われていない
ステータスⅡ(清浄化対策強化段階)
感染豚の摘発がある+ワクチン接種が行われている
ステータスⅢ(清浄化監視段階)
感染豚の摘発がない+ワクチン接種が行われていない
ステータスⅣ(清浄段階)
ステータスⅢが1年以上継続

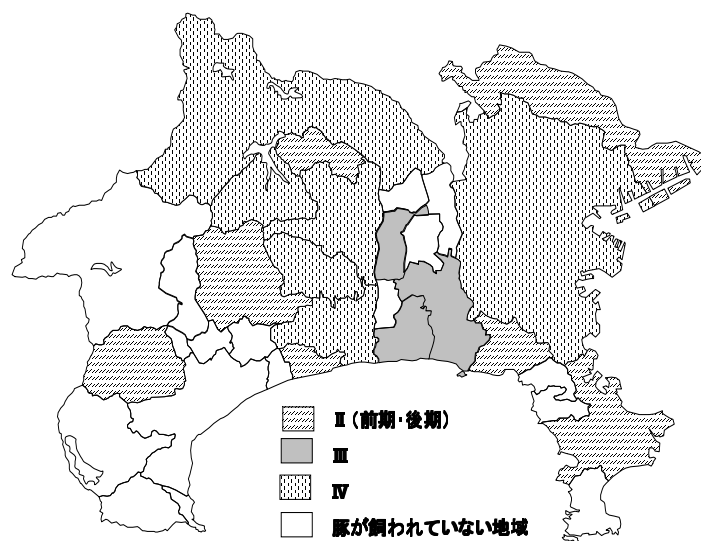


図4 ステータス別地域

まとめ

昭和57年から県内全養豚場に対して、年2回の繁殖豚10%定期検査と野外感染抗体陽性豚の摘発と
う汰、ワクチン接種の徹底等を実施し、ここまでの成果があがったものとする。このように本県の
ADは清浄化まで今一步というところまできている。しかし、清浄県になるためには、大規模と畜場
を2ヶ所もかかえる本県としては、近県の清浄化とワクチン接種を終了することに対する生産者の理
解が重要となる。

稿を終えるに当たり四半世紀に及ぶAD清浄化へ向けた取り組みの歴史はすべての養豚農家と関係
機関、そしてワクチン接種を推進していただいた指定獣医師のみなさまの尽力によるものであった。
そして、この報告こそ、神奈川県でのADに関する最後の発表になることを強く願っている。

引用文献

- 1) 神奈川県環境農政部畜産課：神奈川県の家畜衛生、49～52(1991)
- 2) 萩原茂ら：昭和59年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、5～10(1983)
- 3) 福岡静男ら：昭和59年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、50～57(1983)
- 4) 瀬戸繁ら：昭和60年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、43～49(1984)
- 5) 井澤清ら：昭和61年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、17～20(1985)
- 6) 草川恭次ら：昭和63年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、66～71(1987)
- 7) 亀井勝浩ら：昭和63年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、72～78(1987)
- 8) 青木稔ら：昭和63年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、83～89(1987)
- 9) 萩原茂ら：平成元年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、24～27(1988)
- 10) 石川弘道ら：平成元年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、78～83(1988)
- 11) 石川弘道ら：平成2年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、69～74(1990)
- 12) 津山香織ら：平成12年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、8～13(2000)
- 13) 後藤裕克ら：平成14年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、56～61(2002)
- 14) 矢島純夫ら：平成14年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、50～55(2002)
- 15) 荒井眞弓ら：平成19年度神奈川県家畜保健衛生業績発表会集録、19～26(2007)